

令和元年6月18日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02504

研究課題名(和文) 19世紀アメリカにおけるアングロファイルとアメリカナイゼーション

研究課題名(英文) Anglophilia and Americanization in the US in the 19th Century

研究代表者

荒木 純子 (Araki, Junko)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：20396831

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題はイギリス起源のコンテンツが「アメリカ」ヴァージョンに作り替えられる英語圏文化で最も重要な現象のメカニズム解明を信仰復興、ジェンダー表象、シェイクスピア上演、オースティン受容の4部門で行うことである。それぞれ17世紀から20世紀の信仰復興現象と17世紀イングランドにおける「新世界」表象、18世紀感傷小説と19世紀家庭小説、17世紀から20世紀の英米におけるシェイクスピア上演、およびオースティンとオースティンの影響を受けた英米作品を分析することにより、「アングロファイル」の「アメリカナイゼーション」がたどった道とその過程で生み出される文化現象の複雑さ豊かさを描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、今日グローバルに拡散する英語圏文化の中でとりわけ受容される「アメリカ的」なものの軌跡を具体的かつ歴史的に明確に示したことにより、今後の英語圏文化受容研究にとって重要な基礎資料及び視座を提供することができた。

さらに本研究は4部門で個別的に具体的対象を分析することにより、信仰問題、シェイクスピア上演の地域ヴァージョン、英米のジェンダー表象、19世紀イギリス文学の受容に関して、従来の地域割り・細分化の視点とは全く異なる広い射程のもとに新たな成果を上げることができた。

研究成果の概要(英文)：This project, "Anglophilia and Americanization in the US in the 19th Century," examines the ways in which cultural practices that originated in England were "Americanized" and produced as "American" contents in the US in the 19th century. We analyze this process of Americanization from four different perspectives: religious enthusiasm, gender, Shakespeare, and Jane Austen. Seen from these viewpoints, the findings reveal considerable diversity in the process of Americanization, including non-linear and back-and-forth trajectories, and even divergence to a new Americanness.

研究分野：アメリカ史・アメリカ研究

キーワード：アメリカナイゼーション アングロファイル ピューリタニズム 信仰復興 ルイザ・メイ・オルコット シェイクスピア オースティン ナショナル・アイデンティティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学におけるアメリカの独自性の研究は、これまで主に移民とその異なる文化がいかにアメリカ化されていくかという「ドメスティケーション」の観点から追及され、近年では Amy Kaplan (2005) や Carol J. Singley (2011) のような充実した成果が出た。しかしアメリカにとって「親」にあたるイギリスからアメリカ文学がいかにアメリカらしさを獲得したかの過程については、Amy Dunham Strand (2008) の研究はあるが十分とはいえない。本来イングランド(イギリス)から移植された文学・文化様式(コンテンツ)がどの程度忠実に複製されたのか、あるいはその諸特性がアメリカの受容者の好みに合うようどのように変換されたのかは、イギリス文学研究者も加えた検証と再検討が不可欠である、という問題意識の共有のもと、共同研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀のアメリカ文学で「イギリスらしさ(Britishness)」はどこまで忠実に複製されたのか、さらにその複製と表裏一体の現象であるアメリカの文化的アイデンティティの形成はどのような意識のもとにどのような過程を経て生まれたのか、検証することである。また、非英語圏「移民文化」の「ドメスティケーション」を中心とする「アメリカ化(Americanization)」研究を修正すべく「イギリス好み(anglophile)」と「アメリカ化」のせめぎあいに焦点を当てる。本研究課題の最終目標は近代アメリカ社会にイングランド(イギリス)を起源とする文化的産物が移植され、さらにアメリカ化された独自のヴァージョン 19世紀後半以降グローバルに拡散する歴史的過程とその特質を解明することである。

3. 研究の方法

イギリス文学・文化研究者2名とアメリカ文学・文化研究者2名の共同作業により、イギリス起源のコンテンツが「アメリカ」ヴァージョンに作り替えられる英語圏文化で最も重要な現象のメカニズム解明を信仰復興、ジェンダー表象、シェイクスピア上演、オースティン受容の4部門で遂行した。初年度は4つの部門においてイギリス文学・文化コンテンツがアメリカにおいてどれだけ忠実に複製されたのか、英米文学・文化研究者共同の検証と再検討を通じてアングロファイルの文化的強度を可能な限り正確に計測した。翌年は各部門における「アメリカニズム/アメリカネス」言説を可能な限り拾い上げ、対応する「プリティッシュネス」言説と比較しその共通する諸特性を特定化した。最終年度は現在グローバルに流通する「アメリカニズム/アメリカネス」がどの点でどの程度固有のものであるかを検討した。

4. 研究成果

第1部門(ピューリタニズムと信仰復興)で荒木は、20世紀と17世紀の信仰復興現象の分析、および17世紀イングランドにおけるピューリタンと「新世界」の関係の分析を通じ、イングランド領植民地においてアメリカナイゼーションの大きな契機であった信仰の追求が、時代が下るとまた別のアメリカナイゼーションとも呼べる側面を見せる過程を検証した。

第2部門(ジェンダー表象)で田辺は、18世紀末アメリカ感傷小説が19世紀アメリカ家庭小説へと展開していく際、イギリスを中心とするヨーロッパの文学/文化を読者に受け入れやすい形に転化しながら取り込むことにより、「アメリカらしさ」の文学的表象として家庭小説を広く内外に認知させるに至ったことを分析した。

第3部門(シェイクスピア上演)で中野は、シェイクスピア受容に関する限り、皮肉なことにアングロファイルのアメリカが17世紀・18世紀のイギリス文化の諸特性を保存しており、さらにこの諸特性が20世紀のアメリカ的なシェイクスピア上演および受容の基盤になる現象を分析した。

第4部門(オースティン受容)で吉野は、Austen受容の検証から、イギリス文学作品が「アメリカ的」感受性に合わせて編集する文化複製の特性と、その弊害として、「アングロファイル」の北米文学観光者が、イギリス現地で直面した「イギリスらしさ」の複雑な構成要素に当惑する現象を検証し、この現象が現代の文化複製の傾向に通じる可能性も考察した。

全部門を通じ、「アングロファイル」の「アメリカナイゼーション」は多方面へ進んでいること、またそれは一方向とも限らず、逆行することもあればまた新たなものを生み出す動きであることもあり、各部門では個々の事例からそれらの過程で生み出される文化現象の複雑さ豊かさを検証した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計12件)

1. 田辺千景、「ヨーロッパをノから読み直すルイザ・メイ・オルコット」、『アメリカ研究』、第53巻、2019年、査読有、77-97頁。
2. 荒木純子、「ベン・ジョンソンの「新世界」と急進派ピューリタニズム 宮廷仮面劇と宗教的熱狂」、『学習院大学文学部研究年報』、第65輯、2019年、査読無、1-14頁。
3. 中野春夫、「魔女の小唄 『マクベス』の挿入歌」、『学習院大学文学部研究年報』、第65輯、2019年、査読無、15-43頁。
4. 荒木純子、「シンクレア・ルイスとフットボール 20世紀初頭アメリカの宗教的熱狂とジ

- エンダー」、『初期アメリカ学会 Newsletter』、第 81 号、2018 年、査読無、1-3 頁。
5. 荒木純子、「アーサー・ミラーと「魔女狩り」」 『るつぼ』の世界』、『人文』、第 16 巻、2018 年、査読有、87-106 頁。
 6. 中野春夫、「シェイクスピア劇と 1590 年代の重税」、『人文』、第 16 巻、2018 年、査読有、63-86 頁。
 7. 田辺千景、「感傷 / 家庭小説の Americanization — Louisa May Alcott と Anglophilia」、『学習院大学文学部研究年報』、第 64 輯、2018 年、査読無、43-59 頁。
 8. 荒木純子、「ジョージ・バランシンと「アメリカのバレエ」」 《ジュエルズ》初演 50 周年記念公演をめぐって』、『学習院大学文学部研究年報』、第 64 輯、2018 年、査読無、61-81 頁。
 9. 中野春夫、「シェイクスピア劇の小唄とコンヴェンション」、『学習院大学文学部研究年報』、第 64 輯、2018 年、査読無、181-213 頁。
 10. 荒木純子、論文「信仰復興における熱狂とジェンダー — シンクレア・ルイス『エルマー・ガントリー』とアメリカン・フットボール」、『学習院大学文学部研究年報』、第 63 輯、2017 年、査読無、69-87 頁。
 11. 中野春夫、論文「オフィーリアの小唄 — エリザベス朝イングランド社会の女性版怨み歌」、『学習院大学文学部研究年報』、第 63 輯、2017 年、査読無、123-152 頁。
 12. YOSHINO, Yuri, “Maria Edgeworth’s Representation of India: The British Empire and Sympathy in ‘Lame Jervas’ (1804)”、『ジェイン・オースティン研究』、第 10 巻、2016 年、査読無、115-127 頁。

〔学会発表〕(計 10 件)

1. YOSHINO, Yuri, “Maria Edgeworth’s Readerly Strategies and Social Vision: Popular Tales and Patronage”、Maria Edgeworth 250 Conference (国際学会) 2018 年。
2. 荒木純子、「シンクレア・ルイスとフットボール — 20 世紀初頭アメリカの宗教的熱狂とジェンダー」、『初期アメリカ学会第 77 回例会』、2018 年。
3. 中野春夫、「シェイクスピア劇と娯楽風俗文化」、『日本シェイクスピア学会第 57 回全国大会』、2018 年。
4. YOSHINO, Yuri, “Stories for the Children of the Empire: Maria Edgeworth’s Popular Tales (1804)” 国際アイルランド文学協会日本支部第 35 回大会 (招待講演) (国際学会) 2018 年。
5. YOSHINO, Yuri, “Sensibility and Slavery: The Impact of ‘The Grateful Negro’ by Maria Edgeworth”、国際アイルランド文学協会第 42 回年次大会 (国際学会) 2018 年。
6. 吉野由利、「英文学の正典と受容 — 文学観光の事例から」、『第 36 回西洋社会科学古典資料講習会 (招待講演)』、2016 年。
7. 中野春夫、「シェイクスピア喜劇の見どころ、聞きどころ」、『品川区共催・立正大学文学部公開講座 (招待講演)』、2016 年。
8. 荒木純子、「『るつぼ』の世界」、『シアターコクーン・オンレパートリー 2016 『るつぼ』 (招待講演)』、2016 年。
9. 吉野由利、「19 世紀英国とアイルランドの文学観光 — Austen と Edgeworth を中心に」、『日本英文学会 (招待講演)』、2016 年。
10. 中野春夫、「シェイクスピア劇の小唄 — 400 年前の艶歌、怨歌、哀歌」、『日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催 — 没後 400 年記念シェイクスピア祭講演 (招待講演)』、2016 年。

〔図書〕(計 4 件)

1. Mika Suzuki, Kimiyo Ogawa 編、YOSHINO, Yuri 他 10 名分担執筆、『Johnson in Japan』、Bucknell University Press、2019 年、総頁数未定 (YOSHINO, Yuri 担当分、Chapter 4 “Jane Austen and the Reception of Samuel Johnson in Japan”、単著、掲載頁数未定)。
2. 亀井俊介編、荒木純子他 3 名分担執筆、『アメリカ文化年表』、南雲堂、2018 年、総頁数 319 頁 (荒木純子担当部分、I 部「先住民・ヨーロッパ人植民地時代」II 部「アメリカ合衆国」1799 年まで、単著、9 - 73 頁)。
3. 田辺千景訳・解説、『コケット — あるいはエライザ・ウォートンの物語』、『アメリカ古典大衆小説コレクション』第 6 巻、松柏社、2017 年、総頁数 230 頁。
4. 一橋大学社会科学古典資料センター編、吉野由利他 8 名分担執筆、『第 36 回西洋社会科学古典資料講習会テキスト』、一橋大学社会科学古典資料センター、2017 年、総頁数 38 頁 (吉野由利担当分、「英文学の正典と受容」、単著、35-38 頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：荒木 純子

ローマ字氏名：ARAKI, Junko

所属研究機関名：学習院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 20396831

(2)研究分担者

研究分担者氏名: 田辺 千景

ローマ字氏名: TANABE, Chikage

所属研究機関名: 学習院大学

部局名: 文学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 10316812

(3)研究分担者

研究分担者氏名: 中野 春夫

ローマ字氏名: NAKANO, Haruo

所属研究機関名: 学習院大学

部局名: 文学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 30198163

(4)研究分担者

研究分担者氏名: 吉野 由利

ローマ字氏名: YOSHINO, Yuri

所属研究機関名: 学習院大学

部局名: 文学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70377050

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。